

審査の結果の要旨

氏名 児玉 眞美

人間の五感の中で、聴覚は子供の知的な発達とコミュニケーション能力の獲得にもっとも大きく関係している感覚である。それ故、さまざまに存在する障害児の中でも、聴覚障害児は言語発達やコミュニケーション能力の獲得において、もっとも深刻な影響を受けることが多い。

一方、歴史的にみて、どの民族でもおよそ 300 人から 400 人に 1 人の割合で聴覚障害が発生するといわれており、19 世紀以来世界的にも聴覚障害への対応が、教育、福祉、医療、科学技術による支援などの各分野でさまざまに試みられてきた。しかし、聴覚障害をめぐる問題はきわめて複雑・多様である。たとえば、言語獲得において、あくまでも通常の音声言語を重視するか手話の使用を認めるか、あるいは、補聴器の問題について、とりわけ最近では人口内耳の埋め込み手術をどう考えるかなど、論争的な問題も多く、世界的にも混乱した状態が続いている。

そこで、本研究では、こうした聴覚障害をめぐる種々の問題を、会話手段や教育方法の選択などの単なる外形的な問題として捉えるのではなく、聴覚障害児を取り巻く人々の感性に潜む軋轢や矛盾として捉えようとした。とりわけ、これまで注目されてこなかった聴覚障害児の母親が抱える葛藤やディレンマに焦点を当て、聴覚障害児をめぐる諸問題の構造を明らかにするための鍵がそこにあると想定したのである。

本研究の特徴は、筆者自身が聴覚障害児の早期教育に指導者として関わってきた経験を踏まえた研究をしている点にある。具体的には、それぞれの聴覚障害児とその母親、そして指導者という三項関係の一翼を担う当事者として筆者自身が位置づけられることによって、複合的な観点で研究資料が得られるという特徴がある。すなわち、第一に、長期にわたって直接指導した当該障害児の事例についての豊富な資料が存在し、第二に、当該障害児やその母親へのインタビューを行うことで、現在の視点からの追加的な資料が得られることとなり、さらに第三に、指導者である筆者自身の姿勢や教育方針の変化自体をも分析の対象にできるという点である。特に第三の点は本研究の独自性を示している。

本研究では、過去 10 年間に於いて、筆者が指導者として深く関わった重度の聴覚障害児 4 名とその母親の事例を抽出し、詳細に考察した。特に就学前期において、母親に影響を与えた因子を分析し、早期教育における母親の支援のあり方を検討した。その結果、次の 4 つの観点を重視した支援の必要性が明らかとなった。

第一は、母親が経験する複雑な感情や心理的葛藤への配慮であり、第二は、乳幼児期の言語発達にとっての意図的でない、自然なコミュニケーションの経験の重要性である。また、第三は、母親によるわが子の「障害の受容」を長いスパンで把握して支援するという点であり、第四は、聴覚障害児の早期教育における専門的な助言という支援の重要性である。

従来、聴覚障害児の早期教育をめぐるのは、医療、教育、聴覚・音声言語、手話など、それぞれの分野の専門家が、それぞれの立場からばらばらな支援を行ってきた。それが過去 2 世紀におよぶ聴覚障害児教育をめぐる世界的な混沌をもたらした基本的な図式である。こうした混沌状態を克服し、聴覚障害児の教育をより豊かに充実させるためには、異なる分野の力を有機的に結びつける取り組みが必要である。すなわち、それぞれの母子の個別の状況に配慮しつつ、医療と教育、福祉と支援技術など、多方面の領域の知見を有し、母親の立場を尊重しながら支援を調整、組織化していく新たなアドバイザー・コーディネーターの存在が重要である。また、こうした人材が医療機関・教育機関に配置されることが望まれる。

本研究は、従来外形的で要素的に論じられがちであった聴覚障害児の教育をめぐる問題について、当該障害児のみの問題ではなく、むしろ母親を中心とする周囲の人の内面的問題や、人と制度との間に生じる関係性に起因するものであることを明らかにした。現在わが国では、今後の障害児教育のあり方を抜本的に検討する議論が政府内で進められており、そうした現状も踏まえ、審査の結果、本研究は理論・実践の両面で、聴覚障害児教育に対して大きな貢献をもたらす知見であると認められたため、学位授与に相当するという合意がなされた。

よって本論文は博士（学術）の学位請求論文として合格と認められる。